2023年度U12ブロックDC
コーチングレクチャー資料

ユース育成部会

JBA JAPAN BASKETBALL ASSOCIATION

Ver.1

2023/7/10　U12コーチングレクチャー

1. 育成と強化の考え方

2. U12選考の考え方

3. 指導内容重点項目

　1）局面別 （2022年度重点事項）

　2）段階的戦術的負荷 （2022年度重点事項）

　3）「リード＆リアクト」　2023/7/4 U12ユース育成コーチ研修会

1．育成と強化の考え方　育成方針とは

JBA理念

「バスケで日本を元気にする」

JBA育成方針

Ⅰ．子どもたちの人間力向上に寄与できるバスケットボール育成

Ⅱ．全ての選手がレベルやニーズに応じて楽しめる環境作り

両立し得ないような二つの側面がスポーツの持つ価値の本質

→　スポーツは人格を養う教育的価値を持った場
→　真剣な遊び：気晴らしの要素　ぞくぞくする興奮　競い合う喜び

（東洋館出版社　スポーツマンシップバイブルより）

育成方針　Ⅱ．全ての選手がレベルやニーズに応じて楽しめる環境作り

1．全ての選手：競技志向とレクリエーション志向

バスケットボールを行う人の志向は，大きく二つに大別される

1）競技志向

ルールを守りながら、成長（競技力、自己/チーム等様々）を目指したい

2）レクリエーション志向

バスケをプレーする事が好き
ルールを守る人も、ルールに縛られたくない人もいる
競技力レベルに関係なく、自己成長へのニーズは様々

競技志向の競技者だけでなく、レクリエーション志向の競技者についても
視野に入れる必要がある

→　運動部活動地域移行への対応策も検討する必要有り

育成方針　Ⅱ．全ての選手がレベルやニーズに応じて楽しめる環境作り

1）競技志向　ルールを守りながら、成長したい

＜育成と強化の考え方＞　勝利の捉え方を育成世代として考える

■育成とは「個の成長」を主とした目的とするもの

→　年代を示すものではない　大学世代やプロでも育成選手といった使い方をする

→　勝利を目指すことは大切　バスケットボールの本質は競争

→　選手達は勝利を大いに求めるべき，但し指導者は考えを持たなければならない

■強化とは「チームの勝利」を主とした目的とするもの

→　勝利を第一にするべき活動がある　例：代表活動　プロチーム

育成世代で勝利を優先して選手に要求してきたことによる弊害例

→　背景

年代毎のチャンピオンシップ＝勝利が唯一の価値と考えてしまう

育成世代のあるべき考え方が語られていなかった

→　勝利に繋がる方法を選択してきた

若年層でのゾーンディフェンス活用　　ポジションの固定化　　役割の限定

指導者が持つべき育成の考え方は

勝利を得る最短の方法ではないかもしれないが

選手の成長に焦点を当て＝「選手が第一」「勝利は第二」

育成世代の施策のコンセプトは

オールラウンドにプレーさせよう　役割を決めすぎない　ポジションを決めすぎない

マンツーマン推進を行い、基礎技術/プレーを学ぶ機会を作ろう

出場機会（プレータイム）を与えていこう

2）レクリエーション志向　バスケが好きでプレーしたい

＜様々なレベルやニーズがある＞

遊びとバスケ競技を分けているのは「ルール」

　　遊び＝ルールがない，ゆるい

　　競技＝ルールの中でプレー

競技レベルは様々

　　レクリエーション志向の中にも技術の高い選手は存在

ニーズ（モチベーション）は様々

　　上手になりたい人もいれば

　　ただバスケットボールをしたいだけの人もいる

　　ルールに縛られたくない人もいる

＜様々なニーズに対応する競技環境（活動環境）があるのが望ましい＞

指導の在り方はいかにあるべきか？

→　競技志向のコーチングは適さないことを指導者は知ること

→　レクリエーション志向の競技者へのコーチングも価値があることを関係者が理解

→　指導内容は競技志向と同じなのか？

大会の在り方はいかにあるべきか？

→　チーム単位の大会参加資格だけでない大会

→　緩和されたルール

→　レクリエーション志向の中でレベル別の設定が必要か？

2．U12世代の選考　説明資料

1．環境別

1）日常の活動環境　「日常のチーム活動」と考える

（問い）クラス分けを行うべきか？

2）日常のチーム構成　「日常のチームを構成するためトライアウトを使うこと」

（問い）トライアウトは是か非か？

3）選抜活動　「DC活動」と考える

（問い）U12で県DCを行い、選抜を行うべきなのか？

2．選考に関する考え方

1）楽しく集中しやすい環境とは

「全ての子どもたちは、レベルやニーズに応じて活動する方が楽しく集中しやすい」

2）平等の考え方：教育的視点、競技的視点で考える

①教育的視点

・学校教育から：機会均等が日本の教育制度＝誰でもどこでも同様に教育を享受できる
・機会を同じにする＝チャンスは平等に与える
・優劣は味合わせないことが基本＝メンタル的に配慮

②競技的視点

・競技レベルで分けていくことが子どもたちにとって活動しやすいので、機会を平等に味わいやすくなる
・幼稚園でも能力別で行った方が楽しめる，参加しやすい、力を発揮しやすい

（意見）

・子どものコミュニティは一つではない　クラス、地域、バスケ
・大人の決めつけではなく，制限をかけすぎないほうがよい？
・選ばれる、選ばれないことはある、という経験は必要だろう
・日本の文化や価値観が影響している：欧米とは異なる価値観がある
　→　日本の平等とは＝教育的：機会均等であること　天才は作られにくい
　→　欧州の平等とは＝競技的：能力別であること　　見合うレベルでの区分けが平等

2．選考に関する考え方

教育的視点と競技的視点のメリットとデメリット

	メリット	デメリット
教育的	全ての子どもたちが同じ機会を持つことができる 力のない者は力のある者に学ぶことができる 劣等感を生まない　格差が広がりにくい	力のある者は力のない者に合わせることで力が発揮しにくい 力のある者は伸びにくい　天才は育てにくい
競技的	力に応じてプレーするので、能力向上を図りやすい 切磋琢磨が生じやすくなる 大差のゲームを生まない プレーに集中しやすくなる	力のない者に劣等感が生まれやすくなる 格差が広がる可能性（伸びる者はどんどん伸びて，そうでない者の成長スピードは異なる）

2．U12世代の選考　意見①

・「誰もがレベルに応じて楽しめることが大切」
・「平等とは何か」のフィロソフィーに基づいているのではないか
・欧米では「権利」の概念が強く「誰もが能力に応じて楽しめる権利を持つ」ことが平等と考えられている部分が大きいです。
・ですから能力に応じて指導が受けられ(プレーを楽しむことができ)、大差の試合を極力なくそう(これは勝者敗者どちらにとっても好ましくないことでしょう)という動きになっていくのです。

・日本ではグループを分けたら可哀想という発想が(これは特に保護者から)出てきますが、実際には子どもたちにとっては拮抗した環境が最も楽しめる環境であることは間違いないと思います。
・大人でも初級中級コースなど自分で最も楽しめる環境を選ぶことは多々あります。
・実際、下のグループであっても、それまで自信なさそうにしていた子が俄然率先してプレーするような姿は多々観てきました。子どもにとってはあまり関係ないですね。むしろBグループに入った保護者が一番の問題になっていたと思います。

・セレクションを行うクラブもあれば、それを一切行わないことを掲げているクラブも存在します。また1つのクラブでセレクションコースとノンセレクションコースそれぞれで募集するところ(例えば石川真之介のクラブ)などもあります。
・すなわち多様性の中で、子どもたちが自分のニーズに応じて選択するということです。
・アイスランドはwell-being(Double Pyramidの左側)を非常に大切にしていますが、だからこそ、能力に応じてサッカーを楽しめるということを大切に、幼稚園の段階から行っています。

2．U12世代の選考　意見②

①「個々にあった環境、競争」
②「すべての子どもがスポーツを楽しめる環境」
③「選択肢を広げる」ことが大事だと思います。

・上記を鑑みると、協会として選抜クラス（サッカーでいうトレセン制度）を設けて、そこに入った子ども達が新たな刺激を受け（①）、新たな楽しみを見出し（②）、競技の新たな学び方や向きあい方、そして新たな仲間との出会い（③）を得ることはとても大切だと思います。ただし、そこで指導するコーチが上述した価値観を持っておくことが大事だと思います。
・また、以前にドイツの事例をお話ししたように、逆三角形、すなわち一度選抜された子どもはずっと候補者である、という視点での追跡的な強化支援も必要と思いました。

・チーム入団のトライアウトの有無ですが、ありのチームもなしのチームもあってよいのではないかと思います。
・ただし、一つ気にしなければならないのは、低年齢であればあるほど、相対的年齢効果が合否や、トライアウト挑戦有無に影響することです。
・このような子どもを見過ごさないように、多様な子どもたちを受け入れる態度を持っておく必要があると思います。
・1～3月生まれの子どもはトライアウトを受けることすらしない傾向があります。

・遊びクラスとエリートクラスを分けることも同様だと思います。
・また、通常は混合練習で、付加的に分ける練習日があるなどの工夫もあってよいと思いました。

2．U12世代の選考　意見③

・11歳・12歳の年代でのエリート教育・トレーニングは実施してもよい。
・ただし，強化に直結する訳ではないとも思っています．
・やはり，この年代では早熟な子どもが選抜される可能性が高く，技術面や戦術面の成長はなんとなく見通せるような気がしますが，身体面や心理面の成長には未知な部分が大きいと思われるからです．
・しかし，この年代から世界で戦うという意識を持った子どもが出てくることによるメリットがいくつかあると思います．

① 選手と指導者に，早い時期から世界を目指す選手に必要な能力（技術力，戦術力，身体能力だけではなく知的側面，人間性，英語能力など）を理解させることによる意識の活性化が図れる可能性がある．
② 選手と指導者に，チームとして全国大会の優勝のような目標ではなく，その後に伸びて世界を目指すという目標を持たせることができる．
（チームで勝つことへの過剰な勝利至上主義を抑制する効果）
③ この年代で世界を目指す意識を持った子どもがいることで，それに刺激される子どもが増える．
④ 指導者がその子どものその後の成長を少しでも意識するようになる．（指導者の啓蒙，どの年代でどのような成長を遂げていくべきなのかという正しい知識を習得）

・指導者と保護者を含めて啓蒙が必要。

2．U12世代の選考　意見④

JBA JAPAN BASKETBALL ASSOCIATION

・JFAは10歳以下（キッズ年代）は選手の選抜よりも、指導者の質を含めた練習環境を充実させることが大切だと考えています（キッズエリート）。誤解があり今だに選抜しているところもありますが。

・U12のトレセンがあるので、11歳からは選手の選抜が行われています。Jクラブのほとんどが選抜していますし、町クラブでも同様だと思います。一方で選抜せずに入ることができるクラスを併設しているところも最近は多くなってきていると感じています（実態は把握できていません）。イングランドやドイツなどのプロクラブはほとんど選抜しています。年齢が低いと選抜するエリアは狭くしているように思います。また、選手の入れ替わりは結構頻繁に行なっているという話も聞いたことがあります。

・11歳、12歳のトレセンでの選手の選考は本当に難しく現在も試行錯誤しているところです。これまでの多くの失敗もあり、それを積み重ねこの年代の選手たちとって最も良い環境は常に考えていかなければならないと思います。

・私の個人的な見解は、この年代の選抜はありだと思っています。選抜しその時点で能力が高いと評価されているグループで練習することで、その選手たちの能力を引き出すことができ、そのことによって選抜されなかった選手たちにとって、より刺激的な環境を国内で作り出すことができるのではないかと思います。言い方は適切ではありませんが、若い年代で選抜される多くの選手は「ペースメーカー」のような存在だと考えています。多くの選手が次、あるいは次の次ぐらいの年代で抜かれます。そのことを理解して大人は選手の成長を見守っていく必要があると思います。途中で抜かれる可能性が大いにある、それでもサッカーを生涯にわたって続けてもらうためにどのように導いていかなければならないかを考えなければならないと思っています。

・海外の情報について整理できていませんが、国によっていろいろな考えがあるなんだなとの認識です。しかし、それぞれの国の文化（政治や教育、人口など）に応じて、価値観が相当異なるので、個人的には絶対これだなと思えるものに出会ったことがないように感じています。もちろん考え方を広げる上では非常に参考になっています。

2．U12世代の選考　意見⑤

・指導者やそこに関わる大人の質を保証できているのであれば「あり」。
・子どもたちの上達したいという思いに応えることができると思うからです．またその学びを各チームへ還元できるためです．
・実際に私のチームの子どもたちが茨城県選抜として招集されたときは伝統的なお考えを持たれた方が監督をしていたので，それはないな，と思っていました。
・選抜組の子とその保護者に対して，いわゆる勝利至上主義的な考えが入り込み，その影響によって，非選抜組の子（と保護者）と指導者（私）が苦労しました・・

・言葉遊びになってしまいますが，「ベーシックとアドバンス」というような分け方はアリだと思います．
・ベーシックコースの子は，バスケ以外のスポーツや芸術系の習い事をするようなイメージで、アドバンスコースの子は，大会に出て試合をすることを前提としているイメージです。

・ドイツの事例を踏まえると，13歳以降では，チーム入団の際にトライアウトを行うことは問題ないと思います。
・ただ，どこのチームにも所属できないといった状況を回避するためにその地域には複数のチームあることが前提になると思います．
・11～12歳ではなしかなぁ・・・と思います．まだ窓口を狭める段階ではないのかなと思います。

2．選考に関する考え方

3)これまでの考え方

・普及をメインとしてきた
・教育的スポーツの位置づけ

4)これからの考え方（提案）

・全ての子どもがレベルやニーズに応じてバスケを楽しめる環境を作る
・子ども・保護者が環境を選べる

→ エリート　：競技的　全国大会で切磋琢磨する環境　高学年で一般に近く
ただし育成の考え（やることを優先しながら勝利を）
将来を見据えた育成観点
より上手になりたい、将来プロを目指したい

→ レクリエーション　：教育的　緩く広く
より参加しやすく　楽しみやすく
ルールに縛られすぎず寛容に

次ページへ

2．選考に関する考え方

4）これからの考え方

・レクリエーション層の重要性、価値の高さをJBAは周知発信する
・エリートユースから外れた子どもへのケア
→ プレーできる場があること
→ メンタルフォローを意識すること
→ セレクトされること、落ちることの経験から次の行動を考える
→ セレクションを受験する場合はこのリスクについて保護者は理解しておくこと
・選抜エリアは小さいエリア：最大は都道府県まで
→ まだ発育途上であり将来を決定する年代にはないので、ブロック以上必要なし
・分ける意義について周知・理解を深める
指導者、保護者がメリットデメリットを知る
→ 勝利至上主義に陥らず，安全に健全に子どもたちを育成する
→ 指導者が自らの自己顕示欲だけに陥らないように注意する
→ 保護者が自らの自己受容感の高揚に陥らないように注意する
クラス分けは
→ 早熟の子どもへの配慮
→ 上のクラスでなくても，後で追いつき追い越す場合があること
今は適した場所で行う方が子どもは楽しい？
指導者が下のクラスの面倒を見ない、ということがないように
セレクション
→ 今の力を見られることが多い：早熟系，生まれ月が影響する
→ 将来有望かどうか：後で見極める場合もあることを知っておく

2．U12世代の選考　説明資料

日常の活動環境 「日常のチーム活動」と考える

（問い）**クラス分け（トライアウト）を行うべきか？**

（答え）**分けるべきであろう　が多数の意見**

ベーシック・アドバンスという考え方・名称の工夫

（理由）技術レベル・体格・能力に応じて分けて行う事が，より楽しさを生む

子どもたちの中で差がありすぎない方がよい

王様にならないですむ

プラトー（学習停滞）を防ぐ

（備考）飛び級システムも同様と考える。早熟な子供が適したレベルで実施。

チーム構成 「チームを構成するためにトライアウトするべきか」

（問い）**なぜトライアウトで作られたチームは全国ブロック大会に出場できないか？**

（答え）今までのU12世代（ミニ）の考え方は「普及＝バスケをやる子供を増やす」ことが優先であり、「強化＝勝つことを第一に」すると様々な問題が発生するため制限を行ってきた（4校枠、移籍制限）経緯がある。普及施策として小学校毎に一つのチームを持つことを目標としてきた。参加選手のニーズとチームの目指す理念がマッチしない場合もあったり、指導者・保護者・選手間でのトラブルの問題を改善するために，移籍を自由としてチームを選べるようにした。しかし、トライアウトして選抜することでより強化色が強まることで勝利至上主義が強まる懸念から、トライアウトで構成されたチームは上位大会に出場できない**場合がある**~~**制限をかけている**~~**（注：都道府県により推薦基準は異なる。20240515追加）**のが現状である。

能力別を是とするならば「条件付きでトライアウトすることはあり」

全国ブロック都道府県大会に出場できないことで別大会が誕生する。

エリートユース層ではJBA登録しないチームが増える可能性。

資料

2023/10/12

2023/10/24

2023/4/1

2021/9/9